

遠藤周作

王国への道

山田長政



平凡社

速藤周作

王国への道

山田長政

王国への道 山田長政 定価一、三〇〇円

一九八一年四月一四日 初版第一刷発行
一九八一年五月八日 初版第二刷発行

著者——遠藤周作
えんどうしゅうさく

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四番地一

郵便番号一〇二 振替・東京八—二九六三九

電話(〇三)二六五—〇四五—(大代表)

印刷——東洋印刷株式会社

製本——和田製本工業株式会社

© Shūsaku Endō 1981

Printed in Japan

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい (送料は小社負担)

目 次

追放された人たち

マカオの浮浪者

象

ヨターティプ王女

二つの戦さ

崩御

黎明しのめの反乱

白い手

硝煙のなかで

犠牲者たち

渦のなか

7

23

39

55

72

88

103

119

135

151

166

虎と豹

182

メナムの流れ

198

王女のために

212

死闘

228

毒草の種

243

再会

258

落し穴

273

人の国、神の国

289

破局

304

壮烈なる死、男の死

325

あとがき

336

装画・守屋多々志 装幀・山崎 登

王国への道

山田長政

追放された人たち

大村から長崎に向うには――

今でこそ坦々たる自動車道路を約一時間で行けるけれども、この物語のはじまる慶長十九年の頃は、諫早^{いさはや}から灌木の茂る野を越え、幾つかの山あいをぬう路を歩き、谷をおりねばならなかった。

その慶長十九年（一六一四年）二月――

谷をおりるその山路を二十人ほどの少年と七、八人ほどの大人とが列を組んでくだっていた。少年たちはいずれも紺色の着物を着ていたが、数人の大人は切支丹の南蛮僧侶がまとう修道服に身をつつんで、なかにはあきらかに鼻たかく、碧眼の外人もまじっているのがわかった。

随分、遠くから来たとみえ、少年たちの着物も埃まみれで、くたびれきった表情をしている。引率者らしい日本人と外人の男とは少年たちをいたわるように

「歌おうぞ」

と声をかけ、自分たちがまず、声をはりあげた。

バンジュ
いざ 歌え^{リンゲワ}
わが舌^{ゲロリオスイ}よ

コルボリス ミステリウム サンギイニスク プレタイオスイ
栄えある御体と 尊き母の御子

と、少年たちも汗まみれの顔を懸命にあげて、これに和した。少年たちのすみきった声は谷に響き、木魂こだまが遠くでふたたび同じ歌をはねかえしてきた。

二月の谷は寒かったが、梢の上にひろがる空は青く、弱い光をうけたひとときの雲が、ゆっくりと流れている。

「ひと時、一息いれましょうな」

と日本人の男は外人に声をかけた。

「子供たちも疲れておるとです」

外人はうなずいて片手をあげた。少年たちはほっとしたように路のかたわらに腰をおろし、腰にさげていた竹筒の水を唇をあてて、むさぼるように飲んだ。

谷の奥から溪流の音が聞えてくる。それを聞きつけて

「神父さま」

少年の一人がたちあがり

「竹筒に水ば入れてよかですか」

神父ペレとよばれた外人がうなずくと、何人かの少年が仲間に続いて谷をおりていった。すると

「西ロマン」

と神父はさきほどの日本人に

「行ってください」

と頼んだ。

谷の傾斜はやや、きつかったが、少年たちは木や灌木の枝につかまって巧みに溪流の音に近づいていった。岩をぬぐう白い流れが木立ちの間にみえる。

「川に入るな。水の冷たかぞ」

西ロマノは少年たちに声をかけ、自分も腰の竹筒をぬこうとして、急に足をとめた。

この寒いのに誰かが溪流に下半身を埋めて体を洗っている。

筋骨たくましい青年で下帯ひとつでその腕をこすり、顔をふいている。彼は灌木の間から何人かの少年が顔を出し、驚いたように自分を注目しているのを見ると、一瞬たじろいだ。

「なんだ。おめえたち」

と一喝した。

「里の子供か」

「御無礼」

西ロマノが少年たちにかわって

「誰もおらぬと思うたので……」

と詫び

「竹筒に水ば入れてもかまわぬとですか」

「俺の川じゃねえよ」男はそっぽをむいて「入れたきゃ、入れればいいだろう」

少年たちが岩に身をかがめ、それぞれ流れの下に竹筒をむけている間、体をふき終った男はぶざぶと水からあがって、ふしぎそうに彼等を眺め

「なにか、この子供たちあ。長崎に行くのか」

西ロマノに顔をむけて横柄にたずねた。

「さよう」

「何者だね。お前たちあ」

「切支丹の信徒にござります」

「切支丹？」

「切支丹追いだしの儀、御存知ありませぬか」

「何だね。そりゃ」

「江戸の徳川將軍さまはこの正月、切支丹信心の者の日本に住むこと、まかりならずと命じられ、その主だった者は長崎に集め、日本より離れよときびしう申されました。われらは切支丹なれば、御布告に従うて、このように島原より長崎に参る途中にござります」

「で、この子供たちも」

「はい。いずれもセミナリオ神学校にて切支丹の宗旨ば学ぶ子供たちにて……」

ほこりによごれた旅装束を身につけた男は怪訝な眼で、もう一度、少年たちを見まわした。

「じゃあ、何かね。おぬしたちはすべてこの日本から、追い出されるというわけか」

「そうなりましょう」

「何処に行く」

「まだ、わかりませぬ」

西ロマノはこの時、うつむいて、ひくい暗い声で答えた。男には何が何だか理解できず

「じゃあ、お前たち、滅相もないものを信じたもんだな。そんな厄介な宗旨なら棄てりゃあよい

のに」

とあわれむように呟いた。

西ロマンは顔をあげて頬に微笑を浮かべた。相手に自分たちの心情がわからぬと思う時、我々が浮かべるあの微笑である。この旅人に切支丹や自分たちの信仰を話しても、ただ、ふしぎそうな顔をするだけだろう。

「では、お先に」

彼は少年たちを促して、谷の斜面をのぼりはじめた。彼等の姿が銀色に光る樹々に消える間、男はじっと岩の上に腰をかけていた。その顔の周りを羽虫がかすかな音をたてて飛びまわっていた。

「愚かな奴等よ」

と彼は地面に唾を吐いて、ひとりごちた。

やがて谷の上から歌声が聞えてきた。男の聞いたことのない、ふしぎな調べである。

バレンティン
イザ 歌え グロリアス
サンキエス わが舌よ
ミステリウム
ゴルザリス 栄えある御体と プレティサ
尊き母の御子

少年たちの歌声はしばらく続き、小さくなり、そして遠くに消えていった。

長崎の町はごったがえしていた。西ロマンという男の説明した通り、この年の正月、江戸の將軍、徳川家康が決定的な切支丹禁教令を發布したためである。「爰に切支丹の徒党、遇々、日本に來り、嘗に商船を渡して資材を通ずるのみに非ず、明に邪法を弘め、正宗を惑わし、以て城

中の政与を改め、己が有と作さんと欲す。是、大禍の萌なり」

家康のブレーン金地院崇伝の記述したこの布告は日本全国で布教を続ける宣教師や主だった信徒はただちに長崎に向い、国外追放の次の命令を受けるまで待機するよう、きびしく命じていた。そしてもしその命令に服さぬ者は禁教するか、処刑されるかのいずれかを選ばねばならぬと付け足されていた。

それまで、家康の内意をうけた奉行たちのさまざまな迫害があったものの、長崎はまだ切支丹の街だった。宣教師の報告によれば五万の人口の大半は切支丹信徒であり、司教館やあまたの教会を持ったこの町では朝晩には鐘がひびき、路で遊ぶ子供までが聖歌を歌っていたと言う。

その長崎の町が正月から一変した。幕府の指令にしたがって長崎奉行、長谷川佐兵衛は佐賀、平戸、大村の兵を集め、戒厳令を布いた。兵士たちは教会を倒し、修院を閉鎖し、この街から切支丹の匂いのするものをすべてを粉々にうち砕くよう命令された。

重苦しい気分が拡がった。人々は家をかたく閉じ、息をこらして、こわごわ窓から街をねり歩く兵士たちの行列を覗き見ていた。見なれた岬のうつくしい教会の塔が縄をつけられ、人夫たちの手で倒される音が、毎日、耳にする鐘のひびきに代ったのである。

追放令を受けた外人宣教師や日本人の主だった修道士や同宿（伝道師）たちはあるいは大坂から舟で、あるいは九州僻遠の地から徒歩で毎日のようにこの切支丹の街に集まってきた。長崎の静かな入江もそれを両手で抱くように囲んだ二つの岬も昔のままでしたが、その入江にへばりついたように固まっている長崎の街はまるで廢墟のようにさびれていた。通りには人影もなく、路に遊ぶ子供の姿も見えない。

それでも長崎の街の信徒たちはひそかに集まって今後の対策を協議していた。彼等の希望は、二十七年前の天正十五年に、時の権力者、関白秀吉が家康と同じように切支丹禁制を天下に發布しながら、南蛮貿易の利益が布教の許可なしではできぬことを知り、少しづつこの禁制を緩和した事実を思い出すことにあった。あの時と同じように新將軍もやがてはこの布告を引っこめ、切支丹信心を黙認するのではないかというのが、彼等の一縷の望みだった。

だが次々と入ってくる噂はそうしたはかない望みをたち切るようなものばかりだった。家康は南蛮の貿易を諦めても、断乎として基督教の日本布教の根を絶とうとしていることが次第にはつきりと判明してきたのである。

それがわかると、信徒のなかには動搖のあまり、ひそかに棄教する者も出はじめた。隠忍自重を説く者と、公然と為政者に反抗すべしと主張する者の二派にわかれた。当時、日本で布教活動をしている最有力の会はイエズス会だったが、イエズス会の宣教師はこの自重派に味方して、教会も自発的に閉じ、信者の暴挙を戒めた。だが、別の布教会であるフランシスコ会やドミニコ会は自分たちの信仰を証するため、公然たる祈禱大会や殉教覚悟の行列を計画していた。このように長崎の街は混乱の渦にまきこまれていたのである。

「そげん飲みつづけると体に悪かよ」

と女は呆れたように男の顔をみつめた。

「体に悪かね」

「俺の体さ」と男は不機嫌に眼をそらせ「それに、これくらいの酒で痛めるような体ではないか

「らな」

「大蛇のごとある」

そう言つて女はクスと笑つた。男は口をぬぐいながら立ちあがつて窓に近より、遠くを眺めた。港はもうすっかり黄昏たそがれて両腕うでのような二つの岬さきが黒く悲しくのびていた。

「あれが稲佐山か。そしてあの麓かぎりに篝かきの燃えるのが見えるが」

「切支丹衆の牢ね。夜通し、奉行所の役人が番ばされととでしよ」

「切支丹の連中は皆、あそこに集められているのか」

男は何日か前に山の溪流で出会つた少年たちを思いだした。あの少年たちもあの火の見える場所に閉じこめられているのか。

「馬鹿な奴等よ」

「誰が」

「切支丹の連中よ。何を信じておるか知らぬが、所詮、役にもたたぬものを崇めてあのような目に会う。狂人きやうじんとしか思えんな、俺には」

「悲しかるね」女はじつと篝のゆれる方向に眼をやつて「もう二度と日本には戻れんとよ。あの人たちは」

その眼に涙なみだが光つたのを男はちらっと見つけて

「お前の故郷はどこだ」

「口ノ津」

「あそこは人買いで有名な場所だそうだな。遠いルソンやジャガタラまで連れていかれる女も多